

③② 聖教の聚集整束に意をこらしておられる事蹟は曾谷抄など多くみられるが宗論に備えてのものであることは『清澄寺大衆中』『報恩抄送文』等により知られる。

一方、このことは『注法華經』撰集のためとも考えられ、更に『注法華經』は文永十一年から建治三年の間に大半が書かれており、その撰集目的の一半は、公場対決を期待しこれに備えて諸宗破立の肝要を弟子に伝えんとしたことにあるとする。山中喜八師「注法華經について」『日蓮聖人研究』（平楽寺書店刊）参照。

更に諸宗破立の大綱を聖人の聴聞と自らの見聞により記述した日向上人の『金綱集』は『注法華經』と密接な関係を有することが山中喜八師の右論稿に証されていて、同じく向師著と伝えられてきた『御講聞書』や興師の『御義口伝』も『注法華經』の筆録であるとして理解されてきた。あたかも『御講聞書』は「自弘安元年戊寅三月十九日連々御講至同三年五月二十八日仍記之畢」とあって、『御義口伝』は「弘安元年戊寅正月一日」とありいづれもこの時期に集中していることが知られる。

③③ 立正安国会刊『御本尊集目録』六〇頁。

③④ 前注同書六五頁。

③⑤ 大曼荼羅・花押の変化等については前注『御本尊集目録』・山川智応『日蓮聖人研究』第二卷所収「日蓮聖

人の花押に就いての研究」・鈴木前掲書等参照。
③⑥ 鈴木前掲書二一七・四五一・四七七頁等。

◆ 編集後記

◆ 本誌は研究調査と伝道実践を結びつける役割をもっている。そこで今号は、現代の伝道論を深めていく提言を特集した。伝道論を考えていくためには、たんなるテクニクを論ずるだけではすまない厳しい現実がある。この現実に対処する伝道論確立のために寺院論や伝道教団論の再検討を試みていかねばならない、というのが新聞、近江論文の主張である。伝道論を考える第一歩となる一文として熟読されたい。

◆ 日蓮聖人の教義弘通の方法論をさぐるのも、現代の伝道論を確立する課題に関連するものであり、その原点を把握しようとした研究ノートである。厳密精ちな考証はむろん大切だが、現代的視野に立つて問題そのものの重要性を見出そうとするものである。

◆ 三田村師の一文は、青少年教化に資するものとして頂いたものである。青少年教化をめざして、種々な角度から理解を深める必要がある、この一文は体験から導き出された内容として参考に供したい。